

令和元年度 くまもと・わくわく基金
冠基金 東京エレクトロン九州・マッチングギフト
冠基金 公益社団法人 熊本法人会ファンド



事業報告

団体名: **NPO法人熊本県難聴者中途失聴者協会**

助成事業名: **難聴者・中途失聴者のコミュニケーション力、
社会参加力向上のための講座**

(1)実施内容

- ① 難聴、中途失聴当事者を対象に、社会参加の支援を目的としたセミナーを開催した。
- ② 聴覚障がい者当事者研究の第一人者 宮城教育大学 松崎丈先生を講師として招き、講演会と当事者研究ワークショップを開催した。

当事者研究とは・・・

「障がいや問題を抱えた当事者が自らの困いごとに向き合い、仲間とともに研究すること」

「困いごとを自分から切り離し(外在化)、そのメカニズムを研究(観察・仮説・実験・共有)すること」

(1)実施内容

当事者研究講演会では、講師から3つの研究事例の紹介があった。ワークショップは参加者の実際の困り事を取り上げ、グループワークを行うことで、当事者研究の進め方を学んだ。



(2)助成金の活用

助成金は次のとおり活用した。

- 報償費

- (1)講師謝金、旅費

- (2)情報保障費(要約筆記者謝金)

- 会場費 九州ルーテル学院大学

- 広報費 ポスター・チラシ作成費、郵送料

- 事務費 資料代、消耗品

- スタッフ費

私たちの事業は難聴者、中途失聴者を主な対象としており、情報保障費が不可欠であるのが特徴。

(3)成果、市民の声(参加者やサポートを受けた方)

①難聴当事者の、「自分の障がいに対する理解」へつながった

(講演会アンケートより)

「(私は)聞いた内容が沢山だと覚えきれず、話すことも限られていたのは自分の性格だと思っていたけど、お話を聞いて納得しました」

「聴こえないことを理解してもらうために(周りの)みんなに話をして、安心して過ごせるように自分のことを考えるきっかけになりました。」

「自分の感じている困難の原因を外在化してみるということが『目からウロコ!』でした。」

(3)成果、市民の声(参加者やサポートを受けた方)

②日頃支援をしている人の「聴覚障がいに対する理解」へつながった

(講演会アンケートより)

「聴者も難聴者もお互いの行動がお互いの行動に影響を与えているという話から、両者が今の自分の状態(どうして今話しかけて欲しくないのか、どうして聞き・尋ねにくいのかetc.)を遠慮せずに(伝え合うことが必要)。」

「カテゴリー化した日常生活での困難の例、Sさんの『トリセツ』の事例は具体的で、当事者の課題を解決していく道筋(アプローチの仕方)を示唆していただいた。」

「『聞こえにくい、聞こえない』こと、そこから生じる『困り感』を理解するのは大変だなと感じています。聞こえる自分の中の考え方(偏見)を取り除く方法を、この当事者研究をやりながら探していきたいと思っています。」

(4)今後の事業展開

従来からこのセミナーの中で、参加者の経験を共有し、お互いに学び合うことを目的に、フリーストークの時間を設けていた。

今後、当事者研究の手法を取り入れることで、常日頃難聴当事者が苛まれている疎外感、孤独感、劣等感等から解放され、前向きで実践的な時間とすることが期待できる。